

ブラジル紀行



会員 **西本 泰造**

要 約

リーマンショック以降、先進国経済の停滞が定着化する一方、BRICsをはじめとする新興国経済の好調さが話題に上る機会が増えてきている。ブラジルは BRICs の一員として南米で確固たる経済的地位を確保しつつある。資源国として、勃興する消費市場として日本企業の進出にも拍車がかかりつつある。それに伴い、知財の分野でも関心の高まりがうかがえる。また、今後 10 年に亘り、ワールドカップ、オリンピック等の世界的イベントの開催が目白押しで、世間の耳目を集める機会も多そうである。日本から遠く、なかなか訪れにくいこの国の実態に少しばかりでも生で触れてみたいとの思いが結実したのがこのレポートである。

目次

はじめに

1. ブラジリアン・ディケイド
2. 1 月の河
3. 代理人事務所
4. INPI
5. その他

はじめに

ブラジルは日本人にとってなじみの深い国の一つであろう。しかし、距離的にあまりに遠いためか、真の知識はそれほど深くない。一般の日本人がブラジルと聞いて容易に想像できるのは、アマゾン川、リオのカーニバル、サッカー、ボサノバくらいだろう。だからブラジルは本当はどんな国なのか、住みやすいところなのか、経済はどんな状況なのか、発展しているのか、なかなか知ることはできない。じゃあどうするか、行くしかない。さらに最近のヒットコマーシャルが背中を押した「じゃ、いつ行くんですか?」「今でしょ。」単純な私は行くなら、今しかないと思った。で、実現したのが生涯初のブラジル紀行である。

ブラジルは遠い。行くためのハードルもまた高い。一つはビザが要る。近年、色々な国に出かけているが、ビザを要求される国は少ない。だからこそ、日本のパスポートはブラックマーケットで高額で取引されていると聞く。今年の 3 月に行ったインドネシアも一応ビザが必要だが、空港で 25 ドル払えばすぐに許可されるアライバルビザの類であった。そんなモノだろ

うと高を括っていたが、ブラジルビザには預金の残高証明を添付しなければならないという代物で、銀行に行って証明を依頼して証明書が出てくるのが 1 週間位かかった。その手間が馬鹿にならない。飛行機のフライト予約も大変。大体ブラジル行には概ね 3 ルートあるらしい。一般的なアメリカ経由ルート、欧州経由ルート、それと近年人気の中近東経由ルート。最初にブラジル人の知り合いから聞いたときはびっくりしたが、地球の裏側に行くのであるから、色々なルートが存在するのは当たり前と納得した。ただし、いずれをとっても乗継を含め 30 時間くらいかかる。最近アメリカルートが敬遠されているらしいが、厳しい入国管理で大変時間がかかり、乗継に支障をきたす状況がよくあるらしい。今回アメリカルートをとった私も実感した。そんなこんなで苦勞してたどり着いたブラジル(今回はリオだけ)だったが、中々印象は良かった。で、まとめたのがこの紀行記である。

1. ブラジリアン・ディケイド

今後 10 年間、ブラジルは世界的な注目を集め続けるだろう。世界的イベントが目白押しにあるからである。

人呼んでブラジリアン・ディケード (Brazilian decade), BRICs 諸国の中でもひととき世界の耳目を集める国となってきている。

- 2014 年 サッカーワールドカップ ブラジル大会
- 2016 年 リオデジャネイロオリンピック
- 2018 年 日本移民 110 周年

(1908年4月28日に移民791人を乗せた笠戸丸が神戸港を出港し、1908年6月18日日系移民がはじめてブラジルの土を踏んだ。当時は金のなる木、コーヒーを求め、みな2・3年働いて、故郷に錦を飾るつもりでブラジルに来たと「日経ブラジル移民史」に記されている。しかし、その後一度も里帰りを果たせなかった移民も多くいるそうだ。)

2020年 サンパウロ万博(予定)

2022年 ブラジル独立200周年

2. 1月の河

ブラジルは1500年4月22日にポルトガル人ペドロ・アルヴァレス・カブラル率いる13隻の艦隊が到達したことに始まる。これが公式のブラジル発見とされている。香料貿易によるバスコ・ダ・ガマのインド航路発見と並んで、ポルトガルの大航海時代を画期する一大事として記されている。だから、今もブラジルの公用語はポルトガル語である。

リオデジャネイロの地名の由来は実は大変なまちがいに由来している。1502年1月にポルトガル人探検家ガスパール・デ・レモスタちがグアナバラ湾の湾口であるこの地に到達。グアナバラ湾は湾口が狭まっているため、てっきり大きな河と誤認した。それで発見した月がちょうど1月だったので、1月の河すなわちポルトガル語でrio de janeiroと名付け、今に残っている。これは来る前に読んだ旅行ガイドで初めて知った。

独特の響きを持つこの名は今や世界の三大美港、観光都市として脚光を浴びて君臨している。リオの名所といえば、まずポン・ジ・アスカール(シュガーローフ・砂糖パン)という名のついた円錐形の岩山(404メートル)、リオの町中からもよく見える。頂上までロープウエーが通じている。次に、コルコバードの峰にそそり立つキリスト像(高さ30メートル)はリオのシンボルとして有名。この像はブラジル建国100周年を記念して造られ、台座を含めると像の高さは約40メートルに達する。9年後のブラジル建国200周年にはどんなシンボルが造られるのか、興味が膨らむ。市街地の周辺をコパカバーナ、イパネマ等の代表的なビーチが包みこんでおり、近代的ビジネス都市にリゾートの雰囲気を醸し出している。



リオのシンボル、シュガーローフ



これがうわさのコパカバーナビーチ

3. 代理人事務所

最大手と2番目、それと中堅の上位クラスの3事務所を訪問させてもらった。

最大手、一族の一人がアマゾンのタバコ栽培で財を成した。その流れがPatent Firmを設立した。名前の通りドイツ系で、10年前まで3代目がパートナーをしていたが、今は誰も直系はいない。名前だけが残った。総勢900人程度、うち資格者が250~300名。リオが本拠で、ほかにサンパウロとブラジリアに支所がある。リオの本部は5階建ての建物。外観よりはるかに内部の面積は広い。元々は学校だったそうで、それをリノベーションしてオフィスとして使っている。1階は全部受付。事務所スペースの外にキャフェテリア、ランチルーム、コンファレンスルーム、資料室、Musiumも持っている。

事務所でのランチの途中で、「あっ。忘れてた。」と、あわてて席を中座した。何を取りに行ったのかとおもっていたら、持ってきたのは、日本の小型の国旗と旗台。あたふたとランチテーブルの上にセットした。きっとほかにもさぞたくさんの国旗があるのだろう

と、モノ置き場を見せてもらおうと、ほぼ世界中の国旗と旗台が揃えてあった。そこで思わず一言。「まるで国連だね。」相手も負けずに「でも、日本のいつも一番前に置いてあるよ。よく来るから。」との返答であった。

2番手 最近分裂してできたグループ。その後合併もあり、現在取り扱い件数は第2位という。やや国内型か。路地を入った古いビルの中で、総勢は190名といったところ。サンパウロにも事務所がある。当所はエキスパートの集まりで、学歴が総じて高い点売りとの由。ビル自体は古いが、ここにいるメリットは特許庁 (INPI) に近いことだと言って、INPI まで案内してくれた。日本には年1回は来ているそうだ。今度の APPA (ハノイ) で会おうと言っていた。ヨーロッパ型の雰囲気がある。

中堅の大手、米国型。総勢50人強。設立2年程度で急速に陣容の拡大を図っている。高層ビルの41階にあって、シュガーローフとカリオのダウンタウンの市街が一望できるパノラミックビュー。何人かは米国のジョージワシントンなどのロースクールでの研修を受けている。若手の多いアメリカ型のやり手集団との印象。特にリティゲーションには強いとの自負。



若手弁護士との飲み会

4. INPI

ブラジル特許庁は正式名称を INPI (Instituto Nacional da Propriedade Industrial) という。今回初めて、訪問させていただいたが、新興国の特許庁の多くが割と辺鄙なところにあるのと対照的に街中にあった。しかもおしゃれな白亜の高層ビルディング。聞けば昨年この20階建ての新庁舎に移転したそうだ。国家工業所有権院とも称されるこの組織は、首都ブラジリアでもなく、最大の都市サンパウロでもなく、リ

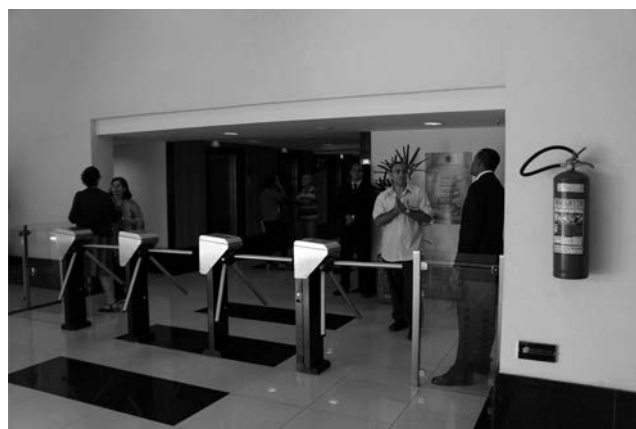
オに所在している。一階が受付、今はとある事務所に勤務する元審査官が同行してくれて、現役審査官とのミーティングをセットしてくれた。みんな話好きで、今春まで日本に研修で言っていたという審査官は、「6カ月間日本に研修に行った。日本は大好き。6カ月間行っていたが、ホームシックになったのは一度だけ。2月のリオのカーニバルの話題の頃だけ。日本各地を回り、京都、宮島、岩国のラウンドブリッジ (太鼓橋?) みんな素敵。ぜひ日本との関係のある仕事を続けたい。日本でもブラジルの IP 制度に興味を持っているね。私も日本では、どのセミナーでも質問責め。日本の大手事務所からもよく質問を受けていた。」との由。他の担当者もほとんどが何らかの研修プログラムで訪日経験があり、総じて日本びいきの雰囲気。でも話がバックログ (審査案件の滞留) の話題に及ぶとみな沈鬱な表情になる。最近出願件数が増えてきており、各種のバックログ解消策を取っていても焼け石に水の状態らしい。

しかし、公式には政府がバックログ解消の約束をしていること、オンライン出願が導入されたこと、デジタル化が推進されていること、審査官の増員計画が動き出した (数年後には700名レベルに達する) ことなどにより、着実に審査の早期化が期待される、との希望的観測だった。また、審査に10年以上かかった時は最低10年間の保護期間の保証がある。(出願時から20年を経過後も保護が受けられるというもの。しかし、アピール度は低い。) その他、グリーンパテントは早期審査が認められており、1年程度で権利化される例もあるらしい。グリーンパテントとは、環境に関する技術関連特許をいうらしい。

新興国は総じて審査滞留が激しい。インドしかり。中国も近年ようやく1万2千人の審査官補を審査協力センターに増員して、審査期間は短縮化しているが、OAで色々問題があると聞く。ブラジルも同じ道のりを歩むのか? INPI からもらった資料の一部を添付しておきます。特許出願件数自体は右肩上がり増加中。日本からの出願はまだそんなに多くはない。自動車やオートバイ関係の企業の出願が先行している。電機業界の進出を求める声が強かった。



特許庁内部の写真



特許庁の入館管理は厳しい

5. その他

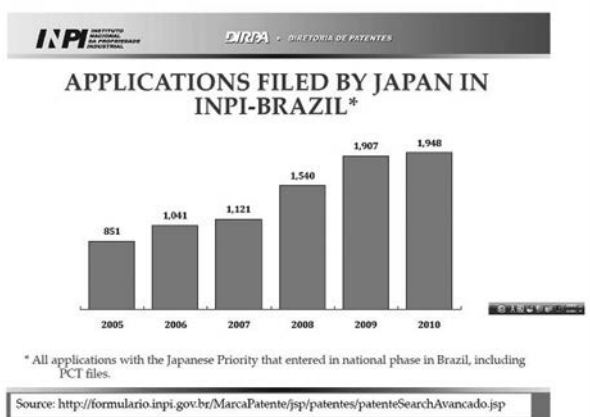
今回の訪問では、代理人事務所の人々、特許庁の関係者など多くの人々とじかに話をする機会を得た。その中から、記憶に残ったとりとめのない話や私の印象を以下にまとめてみた。

アリガト

「日本語でオブリガードって何て言うんだっけ？」

「アリガト」

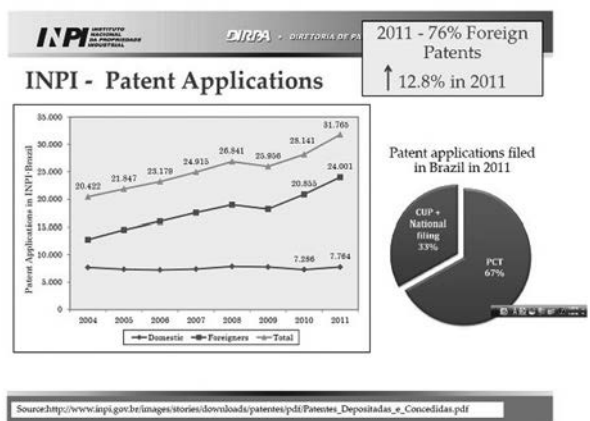
「そうそうアリガト。それってオブリガードから来



Created in 1970, INPI is the authority responsible for the improvement, dissemination and management of the Brazilian system of authorization and security of intellectual property rights.

Praça Mauá, 7 – Centro, RJ (1970) | Rua Mayrink Veiga, 9 – Centro, RJ (2006) | Rua São Bento, 01 – Centro, RJ (2012)

www.inpi.gov.br



-
- ### TOP 20 APPLICANTS (2011)
- Nokia Corporation (FI)
 - Honda Motor Co LTD (JP)
 - Goodyear Tire & Rubber Co (US)
 - Johnson & Johnson (US)
 - Deere & Company (US)
 - Unilever N V (NL)
 - LG Electronics Inc. (KR)
 - Electrolux do Brasil S.A. (BR)
 - Qualcomm Incorporated (US)
 - Whirlpool S.A. (BR)
 - Petrobras (BR)
 - Thomson Licensing (FR)
 - Yamaha Hatsudoki Kabushiki Kaisha (JP)
 - SCA Hygiene Product AB (SE)
 - Microsoft Corporation (US)
 - Samsung Electronics Co, LTD (KR)
 - Volkswagen (DE)
 - Volvo Lastvagnar AB (SE)
 - Motorola Inc. (US)
 - Toyota Jidosha Habushiki Kaisha (JP)
- www.inpi.gov.br

ているの知っているか？昔、日本にもポルトガル人がきていただろ？」

「来ていたよ。」

「彼らがオブリガードって言葉を持ち込んだんだ。それがアリガトになまったんだ。オブリガード、オブリガードって3回言ってみて。アリガトに似てるだろ。」

「本当？あんまりその説聞いたことないけど。」

「本当だよ。カステーラって言葉もあるだろ。あれもポルトガル語だ。」

ブラジルは広い

「なんてったってブラジルは広い。広大だ。アメリカより広い。アラスカを除いた大陸部分じゃブラジルの方が広い。アマゾンのジャングルも広大だ。この前飛行機で飛んだので測ってみたら、飛行機で3~4時間飛んでもまだアマゾンのジャングルの上だった。」

スシ・サシミ・サケ

「ブラジル位だろ、中華料理店より日本料理店の方が多い国は。」この話は今回の訪問で様々な人から聞いた。ブラジル人はみな日本料理好きだ。オマエのホテルの近くにいい日本料理店があるから連れて行ってやろう、ということになって連れて行ってもらったが、お店の前には行列。親父さんに聞くと、「予約が無いと無理ですよ。」とつれない返事。しかし、待つこと20分で何とか部屋を確保してくれた。お店の中も結構混んでいて、日系人というより、現地の人を楽しんでいる様子。彼らは日本食に慣れていて、頼んでくれたのは、スシ・サシミ・ウナギの握り。それをキンビールで乾杯しながらいただいた。そんなに海外でスシを食べた方ではないが、個々の料理は日本そのもの。普段我々が食しているスシ・サシミと全く同じ。見たこともない何とかロールという食べ物ではなく、正統派の日本食だ。ひとえに現地に日系人が多く暮らしているためか、まったく違和感なく楽しめた。因みに、現地ブラジル自慢の料理はシユラスコ。ある事務所のボスが連れて行ってくれた。串に刺した肉の塊を、ガウチョ（南米のカウボーイ）スタイルのボーイさんが客席を回って、希望すれば肉を切ってくれる。ミディアムレアの感じで柔らかくおいしい。色々な肉の部位を焼いた串を持ってまわってくるので、欲しいものだけ、頼んで切ってもらおう。いつまでたっても串

を持ってまわってくるので、聞くとテーブルの上にある丸いカードの表（緑色）を裏返す（赤色）ともう持ってこないそうだ。緑色は yes please, 赤色は no thank you を示していると教えてくれた。ミドリと赤はこの店だけのルールなのかもしれない。

酒とカイピリーニャ

ブラジル名物の酒はカイピリーニャとって、サトウキビから作ったアルコール度数40度の蒸留酒カシャサに砂糖とライムを混ぜたもの。口当たりがよく何杯も飲めそうだが、

しきりに周りのブラジル人が気を付けて飲め、2~3時間後にドット酔いが回ると脅かされて、一杯だけ恐る恐る時間をかけてトライした。なるほど、口当たりがよく、飲みやすいものだった。2~3時間後どうなるのかと思っていたが、アルコールに強くない私でも特に何ともなかったので一安心。

サケが通じる。聞けば日系移民向けの日本酒が当地では80年近い歴史を持つそうだ。また、折からの日本食ブームもあって、日本の酒造メーカーの米国産日本酒や日本からの日本酒もかなり入ってきているとのこと。先ほどのカイピリーニャのカシャに変えて日本酒をいれるサケピリーニャがアルコール度数も低く、女性にも飲みやすいということでリオ等の都会で人気を博している様子。

生活・文化的にはヨーロッパの雰囲気の色濃いブラジルも海外の渡航先として一番人気はマイアミらしい。ブラジルは物価が高い（日本と同じ感覚）ので、買い出しにマイアミまで行くそうだ。マイアミはリオやサンパウロから距離的に一番近いアメリカの都市の一つ。物価が安い（ブラジルの半分程度）ので、買い物したり、テニスを楽しんでのんびりと過ごすらしい。その一方、食には日本の影響が強まっているように思えた。

交通渋滞

ブラジルも新興国の例にもれず、インフラ整備が遅れているらしい。みな、交通渋滞が多く不便だというのが、今回感じた範囲では、2月前に行ったジャカルタのそれとは雲泥の差ではるかにまし、というのが私の実感。ここには地下鉄もあるそうだ。

メルコスール（南米南部共同市場）

アルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイ、ベネズエラ、ブラジルの5カ国で構成。

GDP3兆3250億ドル。これはドイツ（世界第4位）に匹敵する規模。もちろん、メルコスールの核はブラジル。ブラジル1国で、今や隆盛著しいASEAN10カ国の合計に

相当するGDPを持つ巨大な経済圏となっている。世界のブロック経済化を象徴しているともいえる。「チリはTPPに参加するみたいだが、おれたちは太平洋国家でないから、TPPには入れない。だからこっちのメルコスールで頑張るよ。」といった雰囲気。

ワールドカップ

1994年 アメリカ大会40万人、1998年 フランス大会50万人、2002年 日本40万人（韓国との共催）、2006年 ドイツ200万人の観客を集めるスポーツ界の一大イベント。

来年の2014年のブラジル大会では、南米の地理的ハンディを押しつけて、60万人の集客が予想されている。決勝戦の行われるリオのマラカナン・スタジアム（屋根付きで収容人員は7万6千人、駐車場1万4千台）も現在改装中で、普段なら競技場の芝生に上れるツアーも休止中だった。ここはオリンピックのメインスタンドとしても使用される。

来年の自国開催、それも第20回の記念大会。サッカー好きのお国柄だから、さぞかし自国びいきの話が聞けると思ったが、以外にも冷静。「今回はダメだ。」「今回はあきらめている。」との話が多い。「なぜ？」と聞くと「チーム作りに失敗している。」「若手の伸びがいまいち。」などの声が高い。「じゃ、優勝候補は？」「ドイツ。」というのが圧倒的だった。サッカーのことはあまりよく知らないが、これからはワールドカップ開催が近づくので少し調べておかないと、と思った。「その他の国は？」と聞くと「スペイン」という声が次に多かった。他には、アフリカのチームも脅威らしい。カメルーンとか未知のチームが急に現れる不気味さを感じているみたいだった。「ウサインボルトみたいなのが急に出来るんじゃないかと不安に思っている。」と本音もでていた。

「サッカーの試合の後もめることはないの？」と聞くと、「アルゼンチン戦の後はかなり、緊迫する。特に敗戦した時は競技場の周囲は危険だ。」と言っていた。

いずこも同じ隣国に対する微妙な感情があるのだなと改めて実感させられた。



町の果物屋さん

ヨットハーバー de Rio de Janeiro

ある事務所のボスが土曜日の午後時間を空けてくれた。お迎えの車をついた先は、ヨットハーバー。リオには一つしかないようだ。道中、「親父の代から2代続けてメンバーだ。ヨットを1隻とプレジャーボートを2艘持っている。趣味は釣りだ。」という話から「日本の△△知っている？」と聞いたら「知ってるよ。あれは世界最高の釣り用のリールメーカーだよ。」「××は知ってる？」と聞くと「知ってるよ。俺のボートの1艘の船外機は××のものだ。20年前に買ったが、今でも最高の状態だ。」と返事が返ってきた。結構、日本製品が浸透している様子だ。着いたヨットクラブはハイソな雰囲気。顔なじみのチーフソムリエを呼んで、チリワインから始まった。「ブラジルは高地が少ないから、良いワインは取れないんだ。ワインなら今や、チリ産かカリフォルニア産がベスト。」のご託宣にのってまずはカンパイ。気温26度。快晴。湿度が低いので快適の一言。眼前には、ヨットの白いマストが屹立。湾の向こう側にはシュガーローフの絶景。また行き交うメンバーも時折紹介してくれる。「あれは国会議員だ。」「あれは大物の財界人だ。小売りチェーンのオーナーだ。」自ずと話題も大きくなる。



リオ・ヨットハーバーにて

Ambush marketing

これからブラジルでは世界的なイベントが続々開催される。「ところでアンブッシュ・マーケティングでわかるか?」「だいたい。」「日本企業は公式スポンサーになるケースもあるだろう。うちはリティゲーションに強い事務所だから、この種の事案には優秀

だ。日本企業はマーケティングやブランディングは不得手だから、何かあったら一緒にやろう。」「おい、あれは大手リテールチェーンの社長だよ。」「何のリテール?」「衣料品。」

「ところで、ブラジルにはユニクロ来てるの?」「まだだ。」「ユニクロって名前は unique clothing を縮めた合成語だよ。」「そうか、unique clothing を縮めてユニクロか。面白いな。ユニクロは売れるぞ。あのファッションはブラジル人に合うね。ぜひ連れてきてほしい。」「そうしたら、何かの公式スポンサーに売り込んで、アンブッシュマーケティングができるね。」たわいもない話に花を咲かせつつ、夕闇迫るころ、再会を約して「乾杯」,「サウージ(乾杯のポルトガル語)」。かくて、ブラジル最後の日は暮れていった。

以上

(原稿受領 2013. 8. 27)

書籍紹介



判型：A5判
 定価：¥2,800 + 税
 ISBN：978-4-902625-76-9
 発売日：2013年11月

「平成26年対応 弁護士・弁理士・司法書士の確定申告と税務」

天賀谷茂・呉尚哲・熊澤直・名取勝也・吉川達夫・ほか著 (レクシスネクシス・ジャパン)

本書は、そのタイトルにある通り、弁護士・弁理士・司法書士の確定申告と税務に特化した内容の本となっている。確定申告と税務について一般的に記載した本は数多く出版されているが、とりわけ弁理士を含む士業だけを対象にしたこの種の本を私は見たことがない。

そのようなわけで、大変興味深く読ませていただいた。私の事務所は、税務のことは申告も含めて税理士に任せているため、迷う場合は税理士にお尋ねすればよいのであるが、それでも細かいことをわざわざ聞くのも憚られるし、弁理士の場合の特有の問題などもあるので、最低限の知識ぐらいは持っていた方がいいと思うことは多い。

本書には、弁理士を含む士業における記帳実務や税務申告について、一般的な基礎知識から事務所開設時のお金の流れの把握の仕方などを含め、大変わかりやすく記載されているし、FAQ形式でも豊富に事例が記載されている。

事務所経営者の弁理士は勿論、勤務弁理士であっても、一読の価値のある一冊ではなかろうか。

(広報センター会誌編集部 副部長 石原 進介)